Of Human Bondage 試論

—— III. ——

脇田　勇

III. Philip Carey の人生遍歴

(1) キングズ・スクールの生活
(2) Heidelberg 時代
(3) Whitstable における Miss Wilkinson との出会い
(4) ロンドンの経理会計士見習
(5) パリの青春（本稿）
(6) ロンドンの St. Luke's Hospital 時代

(5) パリの青春

Of Human Bondage の Philip は前節で述べた如く，ロンドンの経理会計事務所に捨台詞を残して辞職し，Blackstable の伯父，伯母のもとに戻り，画家志望の件を告白し，パリに旅立って行くことになっている。

モーム自身は1892年ロンドンの St. Thomas's Hospital の付属医学校に入学，はじめの2年間は医学の勉強を怠け，作家としての勉学に専念する。2年の終りの頃，外来患者係の実習生になってからは，やっと興味を覚えはじめる。虚飾を剝いだ赤裸々の人間に接し，絶好の人間探究の機会にめぐりあったからである。*A Writer's Nolebook* は，彼の入学の年1892年からはじまっているし，1897年には処女作の長編 *Liza of Lambeth* を出版，医学校を卒業している。しかし処女作の成功で自信を得，文学で身を立てる決心をし，憧れのスペインを訪れ，Andalusia 地方などを旅行している。1898年には長編 *The Making of a Saint*, 1899年には短篇集 *Orientations*, 1901年

には長編 *The Hero*, 1902年には長編 Mrs Craddock が発刊され，1903年には4幕物の戯曲 *A Man of Honour* が Stage Society によって上演され，そして1904年パリに行ったことになっている。

パリに着いたモームは，Montparnasse のアパートの5階に居を構え，画家や作家たちのグループと交わり，ある時は Gerald（後の王立美術院長の Sir Gerald Kelly で，小説では Lawson のモデルとなっている）と同居した。彼は新しい印象派の画家たちの刺戟的作品にひきつけられる。(1)

彼は Arnold Bennett や George Moore, その他の作家たちと知己になる。作品では Cronshaw として不滅の名を残す Aleister Crawley なる，奇妙な fake（山師）で，時としては面白い悪童じみた男もいた。これらの芸術家志望のボヒィミアンのロマンチックな生活を観察したのである。自らは直接たずさわらなかったにしても，絵画や文学の刺戟的な運動の真只中にいたのである。彼は金欠で困窮するほどではないが，収入は必ずしも多くなかった。その結果，金に対し用心深い，健全な，永続的な尊重心を身につけた。*The Summing Up* の「金というものは，第六感のようなもので，これがなければ，他の五感の楽しみを十分に尽すことができぬ」(2)という言葉は，作品の中では Philip の絵の教師 Foinet の口を通して語られている。(3) パリでの二・三の友人にとっては，モームは資産を持った青年と思われた。父親の遺産からの年金150ポンドと平均100ポンドの著作の収入があったからである。

世紀の曲りかどで，心を湧かすような生活をパリで営み，親しみ深い，芸術的な仲間とのつき合いは，彼に多くの幸福感をあたえ，みじめであった少年時代，青年時代のことを客観的にながめることができるようになったのである。

---

(1) Richard A. Cordell: *Somerset Maugham*, p. 38.
(2) W. Somerset Maugham: *The Summing Up*, Chap. 32, p. 112.
(3) W. Somerset Maugham: *Of Human Bondage*, Chap. 51, p. 377.

Philip Carey のパリの生活は *Of Human Bondage* の40章から52章の間に記されている。Blackstable の伯父は，Philip がパリへ行って絵の勉強するという計画に仰天する。画家というのは，まっとうな職業ではなく，いかがわしい，不道徳なボヒィミアンのやることで，何としても許せないと言う。伯母は心を傷め，弁護士の Nixon 氏に手紙を出すと，傭主の Mr Carter は Philip の勤務ぶりは甚だ不満足だとのこと故契約を取消したがよかろうとの返事がきた。伯父は Philip に父親同様医者になってはとすすめるが，Philip は決心を変えない。Philip は父のかたみの金時計などを売って9月1日に出発すると言い出す。伯母は彼の決心の強固なことをさとり，不時の出費にそなえ預金していた100ポンドをおろして，彼に与える。冷淡で，身勝手で，馬鹿馬鹿しいまでにわがままな夫に対して，この伯母が愛情を抱いているのはどうしたことだろうと彼は思ったりする。冷酷そのものの伯父と対照的な伯母に，Philip は再び深い感謝の気持を抱くのである。

Philip は別れを惜しむ伯母に駅まで見送られて，パリに向けて出発する。Montparnass 大通から横に入った汚い通にある Hôtel des Deus Écoles に部屋を借りる。翌日，Heidelberg 時代の友人 Hayward から紹介されていた Mrs Otter を訪ねる。彼女は Amitrano 画塾で会計係をしていて，新参の Philip の世話を色々してくれる。そしてそこで，Philip をめぐる何人かの女性の一人となるイギリス娘の Miss Fanny Price に紹介される。彼女は魅力のかけらも感じられない26才の女で，画才もさしてあるとは思われないが，Philip に親切にふるまってくれる。痩せて長身の Clutton という男があらわれる。humourist と自ら称しているこの男と Price とのコントラストが面白い。Clutton の案内で行ったレストラン Gravier 亭で，Flanagan, Lawson に紹介される。彼らの取交わす話の中で出てくる Monet, Manet, Renoir, Pizarro, Degas などの画家の名を聞いて，心は喜びに躍り，夢のような時間が経ってゆく。

Montparnasse 大通から，Luxembourg 公園あたりを散策している Philip は，そこにいるというだけで興奮にふるえる。そこは彼の頭の中で，古典的

な場所である。夕食に Gravier 亭に行くと，Flanagan, Clutton, それに Lawson もいて，盛んに絵画論に花を咲かせている。Zola, Ruskin, Keats, Byron の名前に次いで，Walter Pater の名前が出てきて，Philip は思わず「Walter Pater はいいだろう」と言うと，Lawson は，Cronshaw という男がいて，直接 Pater を知っている詩人だと教えてくれる。La Closerie des Lilas というカフエに行くと Cronshaw に会えると聞いて，Philip は行く決心をする。

Cronshaw はパリで絵の修業をしている若い連中に思想的に多大の影響をあたえている男である。彼自身は卑しい女とむさくるしいアパートで同棲して，毎晩安酒に酔いしれて，怪気焔をあげている。まじめともふざけともつかぬことを語っているが，時に鋭いうがったことを言う。Philip の人生の意義への開眼はこの Cronshaw が贈ってよこしたペルシヤ絨毯の一片に負うているが，この点は後述の 106 章のクライマックスの時，再度ふれることとする。この節の冒頭にふれた如く，Cronshaw なる人物は Aleister Crawley[(4)] から思いついたものである。彼は風変りな詩人で，魔術をたしなみ，当時相当売れていて，異境に住む他の多くの作家たちとともに，1904 年モームが知り合うことになる。彼には小悪党的なところがあり，自分の両親の属している Plymouth Brotherhood の野暮ったさにはげしく反抗して，自分自身のことを 'the wicked man in the world' と自虐的な言葉をはいて喜んでいる。彼の知性は，動的とは言え混沌としたもので，なかなかの博学であったが，常識を欠き，小説の Cronshaw よりは魅力的ではなかった。

Philip は Clutton, Lawson とともに Closerie des Lilas に行き，Cronshaw に紹介される。この詩人はウィスキーを飲みながら，Mallarmé の話をしたり，自作の詩を朗吟したり，芸術など人生の逃避だと言ったり，真面目な顔をしていると思うと，次の瞬間ふざけたふりをしていながらいい忠告をしたり，賢明と愚劣を混ぜあわせたような人間像として描かれている。芸術逃避論は次のような言葉で語られている。

---

(4) Karl G. Pfeiffer: *Somerset Maugham*, p. 45.

"Art," he continued, with the wave of the hand, "is merely the refuge which the ingenious have invented, when they were supplied with food and women, to escape the tediousness of life."(5)

この夜のことを色々反芻しているうちに「今にきっと偉大な画家になってみせる。それを身内に感じるのだ」という気持になってくる。

Amitrano 画塾に来る教師の Foinet は，印象派の絵をこきおろし，画学生からは怖れられている。彼は Fanny Price の絵を見て，君には才能がないから，絵をあきらめて洋裁でもやった方がいいと酷評する。この Price に案内されて印象派の作品 (Caillebotte's Collection) の陳列されている美術館に行き，Manet の *Olympia* の説明をきかされる。Watts や Burne-Jones の理想主義に漠然とひかれていた Philip は，精神的に訴える Manet や Monet の作品にとまどいを覚える。即ち Watts や Burne-Jones の美しい色，気取った絵が彼の審美眼を満してくれていた。その画題の下にある何か哲学的思想らしいものが，Ruskin のいう芸術の機能のような考えと実にぴったりと合って，満足感をあたえてくれていたが，今倫理的訴えなど全然ないこれらの作品を前にして，困惑の態である。

Price の親切過剰にいささか辟易してはいるが，日曜日に Louvre にさそわれるとつい承諾してしまう。彼女から数々の名画の説明をきいたあと，さわやかな秋の大気にいい気分になって，とあるレストランにさそう。彼女が野獣のようにガツガツ食べるのを見て興ざめしてしまう。Price という女性は，今日仲好く別れたからと言って，明日無愛想でないという保証がない。自分では碌に描けないのに，教えることは実によく知っている。Philip はまことに不思議な女性と感じる。Lawson, Clutton, Flanagan は，Philip に，彼女は君に惚れているから用心しろと忠告する。

Philip は自分に接触を持つ人間たちについてさまざまな印象を持ち，人

(5) W. Somerset Maugham: *Of Human Bondage*, Chap. 42, p. 288.

間性に対する関心を持ちはじめる。Clutton という男は才能があり将来物になりそうだが，果してどうだかわからない。Lawson は興味の範囲も広く，仲間としては面白い男である。彼は他の誰よりも読書家で，彼から借りた書物で，Flaubert, Balzac, Verlaine, Heredia, Villiers de L'Isle-Adam などの フランスの 作家，詩人を 知るようになる。印象派の画家の作品に対する 最初の驚きは 賞賛に変り，自分も長髪にし，服装も画学生らしくなり，Montparnasse 大通りを得意になって歩くようになっている。

45 章は，今後の物語の発展の上に，即ち Philip の人生観確立に大きな意味をもっている一章と言える。Philip は Lawson, Clutton らに対して，Cronshaw が絶大な影響をあたえていることが判ってくる。Cronshaw はパリのイギリス新聞社に勤めていたが，酒が理由で首にされ，今では一・二の新聞に絵の批評を寄稿したり，翻訳などをしながら，糊口の資を得ている。あれだけの鋭い知性と美に対する情熱の持主が，どう見ても彼にそぐわない卑しい女性と同棲しているか，友達連中には疑問でならない。彼は Philip に好感を持ち Philip もその魅力のとりこになる。Philip との人生論議に出てくる Cronshaw の言葉は，モーム自身の人生観とかなりの程度オーバーラップしていると 言える。自分は 自作の詩を 買い被っているわけではないが，生の一瞬一瞬から，それが与えてくれる情緒をもぎとっているのだ。創作は生に快楽を加えるための美しいはたらきであると断言する。

> I do not attach any exaggerated importance to my poetical works, Life is there to be lived rather than to be written about. My aim is to search out the manifold experience that it offers, wringing from each moment what of emotion it presents. I look upon my writing as a graceful accomplishment which does not absorb but rather adds pleasure to existence. And for posterity—damn posterity.(6)

善悪の観念については，善という言葉も，悪という言葉も真平で，一切無

(6) Ibid., Chap. 45, p. 313.

意味だという。

> But when I speak of good and bad ... I speak conventionally. I attach no meaning to those words. I refuse to make a hierarchy of human actions and ascribe worthiness to some and ill-repute to others. The term vice and virtue have no significance for me. I do not confer praise or blame: I accept. I am the measure of all things. I am the center of the world.(7)

Philip は，人間は時に欲することをしないでかえって欲しないことをする場合のあることをご存じないかと問うと，Cronshaw は，そんな場合でも，人間は将来のより大きい快楽を期待しているからこそ選ぶのだと答える。

> You put your questions foolishly. What you mean is that people accept an immediate pain rather than an immediate pleasure. The objection is as foolish as your manner of putting it. It is clear that men accept an immediate pain rather than an immediate pleasure, but only because they expect a greater pleasure in the future. Often the pleasure is illusory, but their error in calculation is no refutation of the rule. You are puzzled because you cannot get over the idea that pleasures are only of the senses; but, child, a man who dies for his country dies because he likes it as surely as a man eats pickled cabbage because he likes it. It is a law of creation. If it were possible for men to prefer pain to pleasure the human race would long since become extinct.(8)

Philip に「君は Cluny の博物館に行ったことがあるかね。行って見たまえ，実にすばらしい，その絵模様の複雑な美しさには，君も舌を捲いて感歎するにちがいないペルシヤ絨毯のコレクションがある。…君はついさっき，人生の意義如何ということをきいた。行ってあのペルシヤ絨毯を見てきたま

(7) Ibid., Chap. 45, p. 316.
(8) Ibid., Chap. 45, p. 319.

え，そのうち，自然に答がわかる時がある」と謎めいた言葉を与える。それいらい Philip の心には，この Cronshaw の言葉が印象深く残って忘れることができない。

パリ生活は意外に高くついて，Philip はそのうち持っていた金を使い果たし，伯父，伯母に頼むわけにも行かず，父が遺した小間物を売って何とか生活している。前述の如く，この点はモームとは違い，フィクションになっている。Lawson はアトリエが空いているから二人で借りようということになり，そこへ引越して行く。新居に移った Philip は得意になっているが，彼を独占したい Price は機嫌が悪く，彼も売言葉に買言葉を言って，二．三週間口もきかなくなる。ある日彼女の方から折れてきて，自分の絵を見てくれという。彼女の下宿でその作品を見て稚拙さに呆れてしまう。ただ単に，色彩感覚がないとか，素人じみた色の塗り方というだけでなく，明暗を出そうという意識もなければ，遠近法も奇々怪々，5才の子供ならもっとナイヴさがあろうと感じる。Philip は，みんなすばらしいとお世辞をのべて，彼女に不快の思いをさせまいと努力をする。

3月になって，みんな Salon への出品で興奮している。その頃 Heidelberg で別れたままの Hayward (Cambridge 出の文学青年で，大学入学当時は秀才で将来を嘱望されたが，その後一向に冴えず，ぶらぶらしている）がパリに来たので，Philip は彼を Louvre へ案内し，おぼえたての知識を駆使して説明してきかせる。Lawson の絵の入選を祝して，彼と Philip 共催のパーティが開かれ，Cronshaw, Hayward も招いて Clutton, Flanagan などが集まり，Miss Chalice が料理に腕をふるう。やがて暑い夏が来て，皆思い思いに田舎のスケッチ旅行に出発する。Philip と Lawson は Fontainbleau の森に行くことにする。Miss Chalice も同行するときいて，Price はあんな汚らわしい女が一緒だなんてと毒づく。Philip はこのみすぼらしい女性から恋されていることは疑えない。Fontainbleau の古ぼけたホテルに滞在中，Lawson と Miss Chalice が恋人同志であることがわかり，Lawson に嫉妬すらおぼえ，自分もあんな気持になれたら幸福だろうと思い快々とし

て楽しめない。恋変は自分を素通りしてしまうのではないかと思ったりする。モーム自身体験したであろうと思われる悲哀（それは彼のどもりからくる劣等感であろう）が，淡々としているが，真実味のある筆致で描写されている。

He thought he detected in her a touch of contempt for him, because he had not had the sense to see that she was there, in his way, and in Lawson a suspicion of superiority. He was envious of Lawson, and he was jealous, not of the individual concerned, but of his love. He wished that he was standing in his shoes and feeling with his heart. He was troubled, and the fear seized him that love would pass him by. He wanted a passion to seize him, he wanted to be swept off his feet and borne powerless in a mighty rush he cared not whither. Miss Chalice and Lawson seemed to him now somehow different, and the constant companionship with them made him restless. He was dissatisfied with himself. Life was not giving him what he wanted, and he had an uneasy feeling that he was losing time.(9)

長い夏も終ってパリに帰った Philip は Amitrano のアトリエに行ってみるが，Fanny Price の姿が見えない。会計係の Mrs Otter に頼ねるとイギリスに帰ったのだろうと言う。Clutton はスペインに旅をして画家 El Greco にすっかり魅せられてしまっている。そのうちスペイン人で画家のモデルをしたりなどして飢と闘いながら一生懸命小説を書いている男と知りあいになる。その作品の拙さにあきれ，ここにも，芸術に対する情熱だけがから廻りしている人間のあることを知る。自らを省みて，自分も時間を浪費しているのではないかと反省する。Philip はふと Fanny Price を思いおこす。彼女は自分の才能に自信を持ち，意志力も驚異的である。Philip はモデルになってくれるそのスペイン人に「僕は，もし自分が本当に駄目だとわかったら，むしろ潔く，画筆を折ってしまうねえ。二流画家になったところ

(9) Ibid., Chap. 47, pp. 340～341.

で，しようがないからねえ」と言ったりする。

ある朝イギリスに帰って行ったとばかり思っていた Fanny Price からの手紙をうけとる。その文面から不吉な予感を覚え，下宿にかけつけてみると施錠してある。管理人とあけてみるとそこには縊死している Price の姿があった。「芸術を放棄してしまうくらいなら自殺するわ…芸術こそ，わたしが心をよせるただひとつのもの」と語っていた Price は，Philip の生活からは永遠に消滅して行ったのである。

管理人の語るところによると，彼女は窮乏していて，食物も十分に買えず，餓死同然であったという。わずかの持物をしらべてみると，自分の名前(Philip) を書きならべた紙片を発見し，何とも言えぬ気分になる。彼女の兄 Albert の住所を知り，電報をうつと翌日イギリスからやってきて，妹の埋葬をはじめるのだが，フランス語が話せぬので，この兄に代って Philip は Montparnasse の墓地への埋葬の手続をすませてやる。この兄がイギリスに帰ったあと，Philip は，たまらない孤独感に襲われる。

> Philip was too restless to work that afternoon, so he jumped on a bus and crossed the river to see whether there were any pictures on view at Durand-Ruel's. After that he strolled along the boulvard. It was cold and wind-swept. People hurried by wrapped in their coats, shrunk together in an effort to keep out of the cold, and their faces were pinched and careworn. It was icy underground the cemetery at Montparnasse among all those white tombstones. Philip felt lonely in the world and strangely home-sick.(10)

このひきこまれるような寂寥感をいやすべく Flanagan を訪ねる。彼は散漫な男であるが美しい心情の持主で，Philip を元気づけようとダンスホールにつれて行く。そこに憑かれたように黙々と踊っている大勢の男女の姿を見る。Cronshaw が，人間行動の唯一の動機だと言った，あの快楽への欲情

(10) Ibid., Chap. 49, p. 359.

が，彼らを駆りたてている。まるで人生の恐怖が彼らの言語能力を奪ってしまい，心の底の絶叫が，そのまま咽喉もとで殺されてしまったとでもいう感じであった。Philip はたまらない嫌悪感をおぼえながらも，彼の胸ははり裂けんばかりの憐憫にはげしく疼いて，外套をとると凍てっく冬の夜寒の中に出て行くのであった。

Fanny Price の不幸な死の思い出を何としてもぬぐい去ることのできない Philip は深い自己分析にのめりこんで行く。Price ほどの努力家はいないし，彼女ほど真面目な人間も稀であろう。彼女は自信を持っていた。しかしその自信など三文の価値もないことが明らかになった。あのスペイン人の小説家 Miguel Ajuria はどうだろう。あの英雄的な努力にひきかえ書いているものの下らなさ，その対照はあまりにもひどい。Philip は今までの学校生活の不幸から，自己分析の習慣が身についていた。自分の感情解剖については，一種独特の鋭さも加わっていた。彼は，ただ物を正確に写すという皮相的器用さ以上のものが果して自分にあるのかと自問する。結局才能も素質もないのに，頭だけで描いている。絵というものは心情がなければ駄目だと悟らざるを得なかった。Salon に出品してみると，Lawson と Flanagan の絵は入選したが，彼のはあっさり落選してしまう。医者や実業家は凡庸でもかまわないが，二流の画家なんて意味があるかと疑を深める。まず Clutton に意見を聞きに行く。Clutton は人が絵を描く唯一の理由は描かなければいられない衝動からなんだ。その点では他の機能と変らないが，それを持っている人間が，比較的少ないというだけの話だ。自分らは内部から，外に向って物を描く。たまたま自分らの眼を世間に押しつけることができれば，世間は大画家というし，できなければ無視してしまう。自分たちは制作するだけで，その結果は一切無用。描いている時に，制作から得られる一切のものは吸い取っているからだと彼の芸術観を述べる。そして Brittany で会った男（ゴーガンのこと）が，株式仲買人の仕事も，家族も捨てて Tahiti へ発って行った話を出し，紳士になりたければ画家をよすより外にないときかされるが，Philip は自分にはその勇気がないことを自覚する。しばらく

会っていない Cronshaw に会って意見をききたくなる。彼は「要するに君は商人だよ。君という人間は，人生を consol（イギリス国債）に投資しておいて，安全に3分の利子を受けとろうというのだろう。僕は浪費家なんだ。僕は資本そのものをすってしまう。僕の心臓が最後の鼓動を打つ時，一緒に，最後の一銭を費ってしまおうというんだよ」と語って，Philip を苛立たせる。二流の画家なんぞにしかなれないというならよしてしまった方がいいと思うと言うと Cronshaw は，そんな生活はぬけ出せるものなら，時間があるうちに早く出た方がよいと言う。Philip はこの Cronshaw の言葉に，彼自身の人生への反省を感じるのであった。

それから2ヶ月ほど，Philip は人生と芸術について考えたあげく，Foinet 先生に会って，これから絵の勉強を続けて行くだけの価値の有無を頼ねる。Foinet 先生から，才能があるとでも言われれば，新しい勇気が出てくるのだが，そして困難，失望，窮乏も克服できるのだがとひそかに期待する。「君には手の器用さはある程度ある。辛抱強く絵の勉強すれば，一応描ける。努力型の画家になれぬことはない。そりゃ君より拙い画家だって，何百人といるし，君くらいのがまた何百人もいる。だが君の見せてくれた絵の限りでは，才能は全然認められないね。あるのは，努力と聡明さだけだ。まあ平凡以上の画家にはなれないねえ」と断言し，勇気を出して他ことをやれとすすめ，「もし手おくれになってしまってから，自分の凡庸さに気がつくというのは，残酷なもんだよ。それじや少しも気持は救われやしない」と言い残して部屋を出て行った。

Philip は，Foinet 先生に自分の部屋で絵を見てもらうために家に入いる時，管理人から渡された手紙に機械的に手がのびて，取り上げて見ると伯父からのものであった。3ヶ月前から病気で寝ている伯母に対する不安の気持が彼の胸の中をよぎった。それは，不安をうらがきする伯母の死去の知らせで，故人の意志によって葬儀に列席して欲しい旨が記されてあった。

翌日 Philip は Blackstable に帰ってきた。40年間つれそった伯父の悲歎はいかばかりかと想像していたのに，意外に平然としていた。伯父は当

分滞在して，9月にでもパリに帰ったらいいではないかと言う。Philip は Foinet 先生の忠告を心で反芻しつつ決心がつかない。伯父が，自分の肖像画を描いてくれと言ったのをきっかけに，画家になるのはやめたんだと言う。伯父は Philip の忍耐のなさをなじる。今後金のことは知らないとまでいう。Philip は自分はもう一人立ちの人間だから金の心配はかけないと言うのだが，伯父は「それはともかくとして，このことだけは認めてもらいたいね，お前が画学生になりたいと言った時，私は反対した。だが，今となっては，私の反対の方が正しかったということをな」といやみをならべる。Philip は「さあ，その辺はどうでしょう。おそらく，私は他人の助言で正しいことをするよりも自分で犯した誤りによって，かえって得るところは多かったんじゃないでしょうか。とにかく私は，自分で自分の運命を試してみました。そろそろ，この辺で，身を固めるのもよかろうと思うのです」と反駁する。伯父は父親の職業をついで医者になるのが一番いいとすすめる。Philip は約十ばかりの職業が頭にあったのだが，伯父に言われると思わず「僕も，その通り考えたんです」と言ってしまい，こんな偶然のきっかけから物を決めるのも面白いと思い，秋にはかつての父の病院へ入いることを決心する。

Philip はキリスト教を信じなくなった時，重荷が肩から取除かれた気がした。彼がパリの2年間で得た収穫は，精神の完全な自由だと思った。これから二・三ケ月の間，ひまをみて Hobbes, Spinoza, Hume などの哲学書を読み，発見すべきものが三つあるように思えてくる。第一は，彼と彼の生きている世界との関係，第二は，彼と彼がその中に生活している人々との関係，第三は，彼の彼自身に対する関係であった。その解明のため念入りに研究プランを立てるのであった。

相変らず人生の意味という疑問は未解決のままである。彼は Cronshaw の言ったペルシヤ絨毯の譬を思い出し，そこに人生の意味があると Cronshaw は暗示してくれたが，自分で発見するのでなければ答にならぬと言った謎のような言葉をくりかえし考えるのであった。新しい人生理論を実践に移そう

と熱意に燃えながら，Philip は1,600ポンドの金とえび足を抱いて，ロンドンへ向け三度目の人生の門出をするのであった。

パリの2年間の生活は，Philip にとって何であったのだろう。パリ到着の当初，彼はあらゆる場所にロマンスを発見する。アパートの5階の部屋すら，物珍しく，魅力がある。ブールバードを散策しても，カフエを訪れても，ぞくぞくと興奮を覚える。アメリカ人のボヒィミアンぶりは絵画的とすら感じる。何か変ったことをしようとアブサンを注文したりする。この強烈な酒に吐き気を催しつつも，その精神的効果は，抜群だと思ったりする。ボヒィミアン生活への憧れは，詩人 Cronshaw との出会いにおいて最高頂に達する。この男は，芸術，文学，人生について，絶妙な雄弁を駆使しつつ語り続ける。他の連中は，やや眉つばの気分で聞いている時でも，彼は完全に心を奪われ，ロマンチックな芸術家の生活に圧倒されて行く。

しかし，Philip の心の中に，ボヒィミアン生活の現実を理解する気持が徐々に醸成されてくる。才能のない女流画家 Fanny Price の悲劇（自殺）が，彼の幻想を破壊する契機となる。経済的貧困と葛藤が，人間性を喪失させるものであることを知る。また芸術家仲間にも，山師やヂレタントやきどり屋がいて，争いと嫉妬が渦をまいている姿を見て，あの奔流のようなはじめの情熱はいつしかさめていくのである。Cronshaw すらその神秘さを失ない，単に面白い堕落した人間としか写らない。その幻滅感にもかかわらず，彼の知的生長の上において，パリは重要な役割を果している。ドイツに端を発する知的発展は，カフエやアトリエにおける熱のこもった議論，また Cronshaw の放談などによって，継続されている。例の British Museum のエピソード（106章）に至るまで来解決の，人間，人生に関する多くの疑問がなげられるのは，Cronshaw の哲学的談論を通じてであった。

この Philip のパリ生活を見て行くと，モームの扱っている重要なテーマは「美」[11]ということが判ってくる。Philip は自分には創造的能力が欠如し

(11) Robert Lorin Colder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, p. 105.

ていることを発見するのであるが，彼の審美的資質はこの芸術家社会との接触によって，鋭さを加え，このあとの彼に大きな力として働き続ける。自分が芸術家であるか否かの発見の努力の描写においてもモームは一つのテーマを導入し，それを後日 *The Moon and Sixpence* でもっと深く掘りさげて行く。即ち芸術的天才とそれにともなう必然的な bondage の問題である。

Philip は自分と他の画学生の間の才能の異質性を感じる。彼らの感じ方は，奥深い所から自動的に湧いてくる本能のように思われてくる。Clutton を観察すると，彼は出口を求めつつある神秘的な力を認める。芸術のために快楽，家庭，金，愛，名誉，義務，責任の一切を犠牲にしたゴーガンの話は，Philip に芸術的資質も一つの bondage であると思わせる。

Philip はついに絵の勉強を放棄するが，それは自分の才能の不足がわかったというよりは，自分の精神的自由を保持し，単に人生を描くというよりは，人生を体験したい気持からである。彼は Fanny Price や Miguel Ajuria のような人たちの如く，才能もないのに，とうてい達成できないものを探究して，全てを犠牲にしている人間の不毛さを痛感させられるのである。たとえゴーガンのように成功した場合でも，自分には荷が重すぎると感じ，彼は人生の体験のため芸術に見切りをつけるのである。芸術家の生活は捨てたにしても，美への感覚は持ちつづけ，そしてその感覚の重要さは，この小説の後述の部にあらわれてくるのである。

Reference Books

References to Maugham's works are to the Heinemann (London) editions.

Of Human Bondage, Heinemann, London, 1966.

The Summing Up, Heinemann, London, 1966.

A Writer's Notebook, Heinemann, London, 1952.

Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, Heinemann, London, 1972.

Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, Indiana Univ. Press, 1969.

Karl G. Pfeiffer: *W. Somerset Maugham*, Victor Gollancz, London, 1959.